

燕雲十六州



遼

中京大定府

東京遼陽府

西夏

西京大同府

南京汴津府

黃河

代州

河內府

黃河

宋家河

太原府

汾州

孟州

孟州

孟州

孟州

孟州

孟州

孟州

孟州

孟州

孟州

孟州

孟州

孟州

孟州

孟州

孟州

孟州

孟州

孟州

孟州

孟州

孟州

孟州

孟州

孟州

孟州

孟州

孟州

孟州

孟州

延安府

北京大名府

陝山泊

東京開封府

西京河南府

京兆府

渭水

興元府

淮水

大江

成都府

大江

江陵府

杭州

明州

台州

岷江

湘水

贛水

閩江

大理

大理

泉州

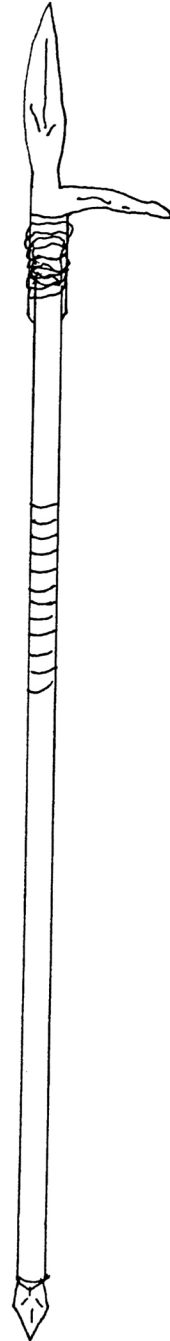
都泥江

西江

昇龍

交趾

戟



1-4

朝から嵐の予感がしていた。西の空が黒々とした雲でおおわれ、なまぬるい風が肌にべたつくように感じられる。杜遷は部下を待っていた。遠くで稲光が見え、雨も昼過ぎからは強さを増している。久しぶりの嵐だ。杜遷は独り言を呟いた。宮城が騒がしい。その一報を運んできたのは、杜遷が信頼している俵の一人だった。何か心が響いた。だが、はつきりと感じたわけではなかった。だから、引き続き監視するようにとだけ命じた。

宋家党の事件が起きてすぐに、杜遷は開封府に遣いを出した。本当は、すぐにでも救出に向かいたかった。黒旋風と宋家党の若者達が、からくも脱出したことを知った。それまで、見えないところで黄文柄の邪魔をした。廂軍を荷車で遮ったり、兵の糧食に眠り薬を混ぜたりしていた。姑息な方法だったが、開封府の元締めを仰いでいないうちは、その程度のことしか出来なかった。もっと裁量権を持たなくては。杜遷はそう反省していた。元締めも、それを補佐する燕順も、決して頭の固い男達ではない。頼めば快諾するだろう。杜遷はそう思っていた。

「頭、大変です」

部下が大慌てで戸を開いた。風雨が旋風を巻いて部屋の中に踊り込んで来た。

「どうした」

杜遷の声は静かだった。

「宮城の騒ぎが分かりやした」

男は荒い息をしながら言った。雨に濡れて、身体から水を滴らせている。

「何があつた」

杜遷の顔に緊張が走った。

「黄文柄が殺られたみたいです」

「何……」

杜遷は絶句した。まさかそんなことが。

「間違いないと思いやす。衛士達が大騒ぎしてたんで」

「そうか……」

杜遷は牀しよから立ち上がった。見上げるほどの背の高さだ。

「とんでもないことになったな」

杜遷は、大きく溜息をついた。憂うれいでいるのではない。逆に、どこか晴れやかな気持ちになっている。

「頭、どうしやしよう」

男は困っている様子ではなかった。楽しみにしていた祭りが近づいている。そんな様子だった。

杜遷は、長い腕を組んで考え込んでいた。

「開封府の元締めから、まだ指示がきていない。かといってここは、一刻を争う事態だ」

「頭……」

「ええい、もういい。これ以上黙ってはおれん。俺の裁量ですべてやる。半刻以内に、集められるだけの俠を集める。そして、宮城に向かえ。必ず得物えものを用意しろとな」

「どれくらい集められますか」

「数のことは言ってもらえん。それよりも時が大事だ。半刻とは言ったが、出来る限り早く来い」

「分かってまさあ。頭が本気になってくれて、俺達は嬉しいっすよ」

杜遷の心の臓が、大きく拍動した。

「おまえ達は、宋家党に心を寄せていたのか」

杜遷が訊いた。心の中を、ぞろりと何かが動き出した。

「へい、俺達皆、宋家党には好意を持っていやした。だって頭、あいつらのやってることは俠ですぜ。弱い立場の者達を助け、理不尽な役人や大商人にはへつらわない。遼だって、宋だって、あいつらとの交易で随分と助かってるって話だ。何てったって、普通の商人よりも安いし、民に届くような商人としか取引しないっていうし。普通なら民

には手が出ないものを、宋家党だったら取引してくれるって。そりやあもう、真面目な商人や民は喜んでまさあ」

男は一気にまくしたてた。普段からそう思っていた。そういうことだろうと杜遷は思った。

「そうだったのか。俺には分からなかった」

「頭には頭としての仕事がありやすし、これは俺達一人一人の気持ちの問題でさあ。いちいち頭に言っつて、煩わすわけにはいきやせん」

「そうだとしても、俺は全然おまえ達の気持ちが分からなかった。失格だな」

「そんなことはありやせん。頭のこととは皆尊敬しておりやす。いい頭を持った。皆そう言っつておりやす」

「分かった、もういい。皆を集めてくれ。数に拘るな、時こそ惜しむのだ。俺は先に行く」

「分かりやした」

男は戸を開くと、風雨の中を走って行った。

その後姿を見送りながら、杜遷は自分の心の中に何かが生まれつつあるのを感じた。

「俺はつくづく馬鹿な男だ」

杜遷は呟いた。本当は、自分が真つ先に駆けつけたかった。侠の仲間のを借りる気はなかった。黒旋風や宋家党の若者達と共に、宋雪華を助けたかった。だが、河東路の侠の頭として、軽々しいまねは出来ない。そう思っつていた。いや、思い込もうとしていた。

「逃げていただけか」

杜遷は自嘲した。

西の果て靈武軍の生まれだった。西夏国境のまさに最前線だ。七つの時に、西夏の侵入で両親を失くした。その後、暫くの記憶はなかった。おそらく何とか生き延びて、東に歩いて行っつたのだろう。頼るあてのない逃避行だった。熙州で一人の侠に助けられた。暑さと渴きに耐えられず、熙州に入る街道で倒れたのだ。それを、たまたま通りかかった侠が見かねて水をくれ、食料も与えてくれた。名を聞かれたが

答えられなかった。本当に憶えてなかったのだ。両親を殺された衝撃からか、その後の逃避行によるものは分からなかった。ただ、自分が何者であるか分からなかったのだ。忘れたのは名だけ。兄弟はいない。子たくさん養えるほどの余裕がなかったのだろう。両親は荒れた靈武軍※の地で、細々と葡萄を作っていた。その葡萄を使って、透明な酒を造っていた。その酒は、甘く酸い芳香がしたのを憶えている。不思議なもので、匂いというものは、強烈に記憶に残るものらしい。今でも、葡萄から出来た赤や透明な酒の匂いを嗅ぐと、両親のことを思い出す。微かな思い出はあるが。 ※靈武軍 秦鳳路西端の軍事都市。

「俺は、頭という立場に逃げ込んで、自分で考えることを放棄した」
杜遷は戸を開けて外に出た。雨は横殴りに叩きつけている。

「皆のためにと言いながら、実は俺が逃げていたんだ」

杜遷は嵐の中を駆け続けた。

助けてくれた俠は、そのまま旅に同行させてくれた。名も杜遷と付けてくれた。親子のようだろう。そう言って笑った。それからは、二人で国中を旅して回った。いつの間にか、父と呼んでいた。その前から、息子と呼ばれていた。第二の父。杜遷はそう心に決めた。

「間に合うか」

杜遷は気が気でなかった。

国中、どこへ行っても歓待された。第二の父は、大俠と呼ばれる存在らしかった。旅の途中、何度か賊に襲われた。時には、三十人ほどの賊に囲まれたこともあった。第二の父は、笑ってそれらを退けた。杖代わりになっている棒で、あつという間に賊を叩きすえていた。子供心にもそれは鮮やかなものだった。十になると棒を教えられた。その頃から背が伸び、十二の時には普通の大人ほどの背丈になっていた。それから背も伸び、今では摸着天と縹名されるほどになっていた。二十三の時に、東西の侠の大抗争が勃発した。西京河南府の大俠波隆と北京大名府の大俠宋惇が、些細なことからいがみ合いを始めたのだった。何が原因だったのかは分からなかったが、各地の侠を巻き込んで、それは大抗争に発展した。第二の父も巻き込まれた。その頃に

は、杜遷も名のある侠として知られていた。二人は西側に組み込まれた。そして、数ヶ月にも及ぶ殺し合いの末、東京開封府の大俠が、腹心の錦毛虎と共に抗争を終わらせた。東西の大俠二人を殺したのだ。今、国中の侠の元締めとして、その大俠は力を尽くしている。第二の父は、仲間同士の殺し合いに嫌気がさしたのか、杜遷を元締めに預けて隠棲してしまった。十歳前のことだった。それから何度も捜したが、ついに第二の父は見付からなかった。生きているとは信じている。何としてもまた会いたい。会って父上と呼びたかった。思い切り抱きつきたかった。

雨が、容赦なく杜遷の頬を叩いている。もつと叩け。杜遷は呟いた。「間に合ってくれ」

杜遷は祈るような気持ちだった。

宋雪華には、一度会っている。侠の大抗争の際に、宋雪華の祖父と父に合力を依頼しに行った時だった。宋雪華は八歳だった覚えがある。二人の大俠には依頼を断られたが、その時茶を出してくれた宋雪華の可憐な姿は、今でも鮮明に思い出す。茶を飲んだのも、その時がはじめてだった。いかつい顔の第二の父が、目を細めて宋雪華を見ていたのを思い出す。あの娘が拷問にあったのだ。しかもこの太原府で。なぜすぐに駆けつけなかった。なぜすぐに助けに行かなかった。指示を待っていた。そんなことは言いわけだ。侠を巻き込みたくなかった。それは臆病者の逃げ口上だ。情けない。俺は本当に大馬鹿者だ。自分を誤魔化し、易きき方に流れようとしていた。

「誰が殺ったかは知らないが、とにかく生きていてくれ。この俺が死なせはしない」

押し返そうとする雨と風に向かって、杜遷は一声咆哮を上げた。

・・・

抜かれるか。楊佖は迷った。黄文柄を護っていた衛兵は総て倒した。だがすぐに、周囲から兵士が集まって来た。三十人はいる。曹瑛を護

って、ここを抜けることが出来るか。まだ兵士はいる。ここには三百人ほどの兵士が詰めているのだ。

「楊佺様、お怪我は」

曹瑛の声だった。この娘は、こんな事態になってもまだ人の心配をしている。楊佺は心が洗われるように思った。

「大丈夫。それより、曹瑛殿にお怪我は」

「わたしは何ともありません」

曹瑛が答えた。曹瑛の隣には、楊林が護るようについていた。

「楊林、気を抜くなよ」

「分かっています、父上」

楊林の声は落ち着いている。いつの間にか逞しさを増した息子に、楊佺は少し誇らしい気持ちになった。男手一つで育てたが、育て方を間違いはしなかった。

兵達をまとめている男が、楊佺に言った。

「楊都虞侯、斧を捨ててください。私は都虞侯に恩があります。何度か武技を教えていただきました。それも親身に。他の教官がいい加減な中で、楊都虞侯は私達を大事にしてくれました」

思い出した。農民出身の、少し線の細い兵士だった。軍隊生活に慣れず、しばしば涙を流していたのを憶えている。時々、郷里の話聞いてやった。その時だけは、嬉しそうに語り続けていた。

「私は、楊都虞侯を死なせたことはありません。どうか、斧を捨ててください。そうすれば、この娘だけ殺して、楊都虞侯と御子息は放免しようと思います」

残りの兵士が、一斉に肯いた。

楊佺は悲しい想いに駆られた。

「それは出来ん。私はこの曹瑛殿とともに、黄文柄を討ちに來た。だから曹瑛殿に罪があるならば、それは私も一緒だ。もちろん息子の楊林もだ。なおかつ、私は曹瑛殿だけでも逃がしたいと思っている。おまえの気持ちはありがたいが、それは私の望みではない。息子も同じだろう」

「父上、私も同じです」

楊林が言った。

兵士は困ったような顔をした。

「ですが、この娘は大罪を犯した者です。見逃すわけにはいきません。どうか分かってください」

兵士達は武器を下げていた。

「おまえは人の心を持った兵士だった。その人としての心で見て、おまえはこの曹瑛殿に罪があると思うか」

楊佶の声は、広い部屋の中によく響いた。

「それは……分かりません」

「もう一つ問う。黄文柄に罪がないと思うか」

兵士は黙ってしまった。

「ことの起こりは、魯權と黄文柄が仕掛けた毘だ。無実の罪で拷問され、殺されかけた宋雪華殿を、助けようとして起こった事態だ。それは、おまえ達も知っているだろう」

「尊で」

「その通りなのだ。失敗すると、禁軍まで出して宋家党を消そうとした。そして私達は、馬鹿馬鹿しい戦いに駆り出された。もし、おまえが宋家党だとしたら、この曹瑛殿と同じことをしたはずだ」

「それは……」

兵士の顔が、苦しいものに変わっていた。

「もしどうしても言うなら、この私の首をやる。私が黄文柄を殺した。そういうことにしてくれ」

「父上、私もです。私も黄文柄を殺しました」

「楊林、父の言うことを聞け。ここを抜けても兵士は山のようにいる。曹瑛殿を一人にする気か」

楊林は唇を噛みしめた。

「おまえは、正しい心を持った兵士だった。おまえの心で見て、そして考えよ。曹瑛殿に罪はあるか」

「楊佶様……」

曹瑛の声だった。

兵士は下を向いている。足元に、涙が落ちていた。

「楊都虞侯、申しわけありません。私は……私は……」

楊佺も悲しそうな表情だった。

「かかれ」

兵士が言った。どこか、悲しそうな声だった。

兵士達は動かない。

「どうした、かかれ」

兵士が叫んだ。

一人が口を開いた。

「隊長、もういいです。隊長の気持ちは分かるが、俺達はこの人達を捕らえたくありません」

「なぜだ。見逃せば、おまえ達が罰を受けることになる」

「隊長が無理をしているのは、俺達のことを考えてでしょう。でも、いいんです。俺達皆、同じ気持ちです」

「そうだ」

「俺達は、これ以上黄文柄の悪事に手を貸したくない」

兵達が口々に叫んだ。

「おまえ達……」

「隊長、死んだ衛士達も同じ気持ちだったと思います。いつも言っていました。知府の護衛が一番嫌な仕事だって」

「俺達もそうだ。いつも近くにいたから、知府の悪どさを見せつけられていたんだ。もう勘弁だ」

「死んで清々したぜ」

兵達はそう言って、黄文柄の死体に唾を吐きかけた。

「楊都虞侯、行ってください。私達は何も見なかった。そういうことです。ただ、外の兵士達は止めようとするでしょう。くれぐれもお気をつけください」

「よかった。おまえ達と戦いたくはなかった。私も大きな間違いを犯していたのだ。兵としてある前に、まず人としてあるべきだったのだ。」

おまえはまだ若い。私の轍を踏まずに済むだろう」

楊佶はそう言つて、兵士の肩に手を乗せた。

「御武運を」

兵士は礼を執つた。

曹瑛は何も言わず、兵士達に向かつて拝礼した。爽やかな雰囲気が、部屋の中に流れはじめた。

三人は部屋を出た。暫く駆けると、兵士達の怒鳴り声が聞こえて来た。

「いたぞ」

「三人だ。囲んで殺すのだ」

口々に叫んでいる。

楊佶が先頭に立った。

「曹瑛殿、ここは突破するしかない」

楊林も前に出る。

兵士達が襲いかかって来た。

楊佶が大斧を振るつた。楊林が兵士達の中に突っ込んだ。

五人が横殴りに吹っ飛ぶ。四人が首を突かれて倒れ落ちる。

曹瑛が、三人の額を貫いた。

「こいつら……」

隊長らしき男が呻いた。

「行け。容赦するな」

兵士達が一斉に突進して来た。

楊林が必死でそれを止めようとしている。楊佶は曹瑛の前についた。

「娘を狙え。娘さえ殺せば、罰は受けん」

隊長が吼えている。兵士達は楊林に構わず、雪崩をうって曹瑛を指した。

「ここまでか」

楊佶が唸った。

曹瑛は、先頭で駆けてくる五人の兵士を射倒した。一瞬突進が止まったが、すぐに兵士達は攻撃の構えを見せた。

楊佶が前に出ようとした時、兵士達の後ろから叫び声が聞こえて来た。

「何だ」

隊長が振り返った。

後ろの兵士達が崩れていた。

「どうしたのだ」

すぐに、見上げるほど背の高い男が隊長の目の前に現れた。

「これでも喰らえ」

男が棒を突き出した。骨が砕ける嫌な音がした。隊長が後ろ向きに倒れ込んだ。顔の真ん中が潰れていた。口から鮮血を噴き上げている。

兵士達が怯んだ。楊林が、素早く周りの兵士を突き倒した。

棒を持った男も、楊林と共に兵士達を薙ぎ倒している。

「副隊長」

兵士達が絶叫した。

呼ばれた男は目を血走らせていた。

「たった四人に何をしている。一気に潰すのだ」

兵士達が包囲を縮めた。

「固まらせるな。分散させろ」

楊佶が叫んだ。

棒を持った男が、兵士達の輪を破った。自分の身を考えぬ、果敢な突進だった。みるみる兵士達の輪が崩れる。たった一人の棒に、兵士達が押されている。楊林は反対側の輪を崩そうとしていた。曹瑛も矢を射続けていた。

楊佶は、慎重に輪の綻びを見定めていた。まだだ。兵士達の輪はまだ厚い。副隊長が後ろの方で兵士達を指揮していた。あれか。あれを殺れば。

楊佶が、楊林の後ろに走った。

「楊林、一点だけでいい。輪を突き抜ける」

「父上、どうするのですか」

楊林の問いに、楊佶は副隊長を指差した。楊林が大きく頷いた。

「うおう」

楊林が雄叫びを上げた。たちまち五人の兵士が吹き飛んだ。楊林は槍を振り回していた。刺すのをやめ、振ることによって道を拓こうとしている。兵士達が退くのが分かった。数が多すぎて、敵は弓が使えない。楊恬はそこに賭けた。

楊林が敵を蹴散らした。その勢いに、兵士達が道を開けた。

「父上、今です」

楊林の叫び声が終わる前に、楊恬は飛び出していた。

副隊長が楊恬に気づいて、慌てて離脱を図る。

楊恬が近づいた。大斧を振った。斧は副隊長の肩を掠めたが、致命傷を与えるまでには到らなかった。副隊長が引きつった顔で逃げ出した。

十歩ほど走ると、棒で足をすくわれた。大きな音をたてて転がった。楊恬が追いついた。兵士達は、戦いを忘れて楊恬を見ている。大斧が、唸り上げて振り下ろされた。副隊長の首が、蹴鞠のように転がった。「どうでい、まだやるっていうのか」

棒を持った男が大声で叫んだ。宮城の門の方から、三十人ほどの一団が駆け込んで来た。手に手に武器を握っている。

「頭、遅くなりやした」

先頭の男が荒い息で言った。

「おう、よく来てくれた。こいつらをたたんじまうんだ」

棒で兵士達を指した。

「分かりやした。いくぜ皆」

一団は、雄叫びを上げて兵士達に突っ込んだ。兵士達は戦闘意欲を失ったのか、あまり抵抗もせずに退き下がりはじめた。

「助かった。あなたは」

訊いたのは楊恬だった。棒を持った男が振り向いた。

「私は杜遷。この辺りの俠を束ねております」

「おお、摸着天の杜遷殿か。名は聞いていた」

「楊都虞侯ですな。お顔を拝見したことがあります」

楊林と曹瑛が、並んで駆け寄って来た。

「これは息子の楊林。そしてこちらは」

「曹瑛さんだろ。何度も姿は見ていた。話したことはないが」

「ありがとうございます」

曹瑛が拝礼した。

「事情は分かっている。今まで助太刀しなくて申しわけなかった。これからは、俺達侠も宋家党に肩入れする」

杜遷が力強く言った。

「そんなにも、わたし達のことを……」

曹瑛は、胸が熱くなるのを感じた。

「父上、今のうちにここを出ましよう」

指揮官を失った兵達は、我先にと逃げ出していた。俠達がそれを追っている。

「そうだな。とにかくここを脱出しなければ」

息子の成長を頼もしく思いながら、楊佺が同意した。

「楊都虞侯、廂軍しやうぐんが動いているようだ」

杜遷が言った。

「衛兵が連絡したか」

「宮城でのことだから、知られるのは早い」

「数は」

「部下の話では、二營にえい※はいるとのこと。宮城への道を固めているようだったと言っています」※二營 兵士千人。一營は、五百人の部隊。

「二營か。多いな」

「侠の仲間もまだ集まると思いますが、せいぜい百。きついことには変わりありません」

「嘆いていても始まりません。とにかく、曹瑛殿だけでも逃がさなくては」

「俺もそう思ってます。この娘を助けなくては侠の名がすたる」

「杜遷殿が来てくれなかったら、ここで討ち果たされていただろう」

「いえ、もっと早く立つべきだったのに、俺がぐずぐずしていたんです。部下に言われて、俺は自分の優柔不断さに気づかされました」

「遅くはない。現に、こうして私達は助けられている」

「いえ、俺はいつもこうだ。慎重と言われるが、そうじゃなくて決断が遅いんです」

杜遷は宮城を睨んだ。こんなもの、もっと早くに叩き壊せばよかつたんだ。そう思った。

狭達を残して、四人は宮城の門を駆け抜けた。楊佺は監視所を見た。門衛が数人倒れている。その中に、あの衛兵もいた。楊佺は目を閉じた。いい若者だったが。心の中で呟いた。これが戦うということだ。楊佺は目を開けて前を見据えた。そしてもう、振り返りはしなかった。

・
・
・

山の日没は早い。なだらかとはいえ、亀伏山はやはり平地とは違った。闇が辺りを包み込んでいる。杜愔は、幕舎の中で興仁貴と向かい合っていた。

「御苦労だったな、興都監」

杜愔が言った。昼間の疲れは見られない。

「嵐でなければ、押し潰せたのですが」

興仁貴が、悔しそうに言った。

「仕方がない。嵐でなければならなかったのだ」

「あの男ですか」

興仁貴の声には嫌悪感が滲んでいる。

「あれはな、蔡京直属の部隊なのだ」

まただ。興仁貴は思った。黄文柄。そして今度は、宰相までも呼び捨てにしている。

「どのような部隊なのですか」

「知らん方がいい」

「では、あの男の目的は」

興仁貴は知りたかった。何のために嵐をおして、あれほど長い間戦わなければならなかったのか。犠牲も大きかった。死んで行った兵の

ためにも、興仁貴はそれを知りたかった。

「目的は……砦の中に潜入することだった」

杜愔は苦しそうに答えた。

「内側から木戸を開けるためですか。それとも、兵糧を破棄するためですか」

興仁貴は退かなかった。

杜愔が目を閉じた。明らかに、言いたくない様子だ。

「兵達、死んだ兵達が知りたがっています」

俺は何で経略使様にこんな言葉をぶつけているんだ。興仁貴は不思議に思った。そして、杜愔に対して礼を失しているとも思った。

杜愔が目を開けた。

「そうだな。おまえは知る権利がある。そして、死んだ兵達もな」

興仁貴の無礼を咎める口調ではなかった。

「あの者達は、嵐を利用して砦に忍び込もうとしていた。そして、宋家党の首魁、宋雪華を殺すことが目的だった」

興仁貴はやはりと思った。

「儂らが攻め続けたのは、黒旋風や東汾山の賊を釘付けにしておくためだった。もちろん、儂はそれだけで戦っていたわけではない。出来れば砦を陥とす。そう思って戦っていた。宋家党の戦いぶりを見て、儂の軍人魂に火が点いたのかもしれない。とにかく、正々堂々と、心ゆくまで戦ってみてみたかったのだ」

杜愔の声に、後悔の色は見られなかった。

「奴らは成功したのですか」

いつの間にか奴らと言っていた。本来なら、味方同士のはずだった。

「分かん。だが、黒旋風はずっと木戸にいた。もし宋雪華が殺されたのなら、黒旋風は必ず前線を離れるはずだ」

死んでいないことを望んでいる。そんなふうに興仁貴には聞こえた。

「平真をそのために……」

興仁貴が訊いた。杜愔は肯いた。

「よく、平真が納得したものですな」

あの平真が。興仁貴は思った。太原府駐屯禁軍の誰よりも、杜愔の側そばにいることを誇りに感じていたはずだった。その平真が、いかに杜愔の命令とはいえ、軍を離れて単独行動をとるとは考え難かった。

「平真はな、水を得たのだ」

杜愔は嬉しそうに言った。

「水を得た……」

興仁貴は不思議そうな顔をした。

「平真は、いつまでも儂の下で、都虞侯にあまんじているような器うつわではない」

「それは分かりますが」

「平真自身は気付いておらんようだったが、いつも飛びたそうな目をしておった。平真は佃戸でんこ出身だから、禁軍の中ではもう上には昇れないことを自覚しておった。実際、幾度も儂が推したのだが昇進はならなかった。それでもくさらず、平真は都虞侯として儂を支えてくれた」

「私も平真を買っておりました。將軍としての力は十分あると」

「蒙重もうじゆうなどより、遥かに優れた將軍になれただろう。だが、この国では平真のような者は浮かばれぬのだ」

杜愔の目は、心なしか寂しそうに見える。

「それを言われると、私も恥ずかしくなります」

興仁貴は素直に言った。平真は自分より上だ。率直に、そう思っていたのだった。

「おまえは立派な將軍だ。蒙重などとは違う。出自しゅつじは一等級の形勢けいせい戸こだろう。自らの力で將軍に昇ったのだ。だが、佃戸ではどうにもならん。平真に金があり、世渡りのうまさがあれば別だが、それを求めること自体無理というものだろう。平真は、軍の給金をほとんど病がちな母のために使っていたのだろう」

「はい。平真の母が死ぬまでは」

「蒙重のように賄賂も取っておらんかった」

「平真と楊佶、この二人は全くと言っていいほど、賄賂に手を染めてはいませんでした」

「平真は金には興味がなかったのだ。ただ、自分の生きる道を捜しておった。本人が気付かぬままな」

「そうだったのですか」

「儂のような歳さいにならなければ見えぬこともある。平真に、生きる道を見つけてやりたい。儂はそう思っおもって平真を出した」

「では、戻るなど言われたのですか」

「戻るなどは言っておらん。だが、戻れとも言わなかった」

杜愔は寂しそうに微笑んだ。経略使様辛つらもかったのだ。興仁貴はそう思っおもった。

「経略使様、奴らが失敗したのなら、これ以上の戦いは無意味ではないでしょうか」

「無意味ではない。この戦いには、馮湧ふうゆうの弔とがいをするという意味もある。何よりも、黄文柄の命令でもある」

「ですが、馮都監は自ら死を選んだと。確かに、生き残った護衛兵は女剣士に騙だまし討うちに遭あったと証言していましたが、兵達は違うと言っております。平真などは、馮都監が負けるはずがない、だから騙だまし討うちに遭あったのだらうと言っていましたが、私には何となく馮都監の気持ちきもちが分かるような気がするのです」

「事實は、おまえの考えている通りなのかもしれん。儂もそう思っおもっているのだ」

「では、なぜ」

「馮湧ふうゆうにな、見せてやりたいのだ。本当の戦いというものをな。数ではない。本当に見事な者達との戦いをな」

「それは、経略使様としてですか」

興仁貴が核心に迫った。本当の心の中を聞きたい。そういう衝動に駆かられていた。

「どうか。儂自身もよく分からんだ。ただな、儂は今楽しいのだ。疲れなど全く感じぬ」

「経略使様が、知府の命令を聴かなくてはならないのは承知しております。ですが、この戦いに何の意味があるのでしょうか」

黄文柄のためになど戦いたくない。興仁貴は、それを必死で押さえ込んだ。

杜愔が牀しょうに腰を下ろした。興仁貴を見る目は、慈愛に溢あふれたものだった。

「おまえはいい將軍に育ったな。戦いの大局を見る。戦いの意味を考える。それは、一軍を率いる将にとつて、最も必要なことかもしれない。おまえはそれが分かる将になった」

「そんな、私など……」

「儂はな、この戦に負けたら責任を取るつもりだ。死んで行った兵達への償おごいにな。意味のある戦いなら、兵士達はそれが仕事だ。儂も兵士達に償いなどせん。だが、おまえの言うようにこの戦いの意義は低い。そんな戦いに駆り出したことへの償いだ」

「それなら、責任は黄文柄にあります」

思わず、黄文柄と呼び捨てにしていた。

「命令を受諾したのは儂だ」

「だからといって、これ以上戦いを続けていけば……」

言つてから、興仁貴は気がついた。これ以上続けるとどうなるというのだ。少なくとも、こちら側は戦いを続けるだけの余裕はある。

「戦いを続けると、確かにあちら側は苦しくなるだろうな」

杜愔が、興仁貴の心の内を読んだように言った。

「いえ、けしてそのような……」

興仁貴は慌てて打ち消した。掌てのひらに汗が滲にじむのが分かった。

「よいのだ。そう思えることは、おまえが人の心を持っている証拠だ」

杜愔の眼差まなざししは優しかった。

「続けるのですか」

「続ける。それが武人としての務めだし、宋家党に対する礼儀でもある。ただし儂は、負けは素直に認める。儂が負けたと思えば、その時が戦の終わりということだ」

「平真はそれを知っているのですか」

「戦の先行きのことは話しておらん。それに、平真の戻るべき場所は

ここではない」

「平真の戻る場所とは」

「平真は気づいておるのだ。ただ、禁軍将校としての経歴が、それを邪魔しておるのだ。」

「という」と

「おまえも、戦ってみて分かっておるはずだ。こちらとあちら、どちらに正義がある。そして、宋家党の者達。おまえも感じておるだろう」

興仁貴は納得した。そして一瞬、平真を羨ましいと思った。あの者達と共に戦えたなら。だが、すぐにその思いを押し殺した。自分は禁軍としての誇りを持っている。せめてもは、全力で戦い抜こう。それが、あの素晴らしい敵への礼儀だろう。もう一人の都監だった張峻は、杜愔が昨日のうちに太原府に戻っていた。体調不良ということだったが、杜愔がこの戦いから遠ざけようとしたことは明らかだった。責任は自分一人が取る。そう思い定めているのだろう。興仁貴は残された。それが何を意味するのかわからないが、自分に出来ることを全力でやるだけだ。

決意を新たにした興仁貴を、杜愔が静かに見つめていた。